

「あきらめないで祈りつづける」

～祈りはクリスチャンにだけ与えられている使命～

「しかし、まことに神はお聞きになり、わか祈の声にみこころをとめられた。」
詩篇66篇19節

韓国、フランスの新大統領が決定しました。世界は動いています。関西電力の高浜原発が再稼働しました。しかし、地元福井の住民からは大きな反対の声が上がっています。しかし、中々国の中枢には届いていない。だからこそ、もっとも当事者たちは本人たちが声を上げて行かなければならないと自覚しているという新聞の記事でした。

それでは、私たちの現場の声はどうなのでしょう？ 一体誰に届いていかなければならないのでしょうか？

本日の聖書箇所ルカ18章は、1節から「失望せずに祈ること」をイエス様は強く訴えています。私たちの現場の声は、切なる祈りによって、すべての主権者である、天の父なる神様に届くようにしていかなければなりません。それが私たちクリスチャン、教会にできる最も大切な使命です。政治や経済をあらゆる情報網を利用して訴えていくことは、この世の人々が行うことができる最良の方法かもしれませんが、クリスチャンだけに与えられていることは、祈りを通して世界を変えていくことです。

しかし、その祈りも方法を間違えると、無駄な祈りとなってしまいます。どんな祈りでも祈らないよりは祈った方が良いことは当然ですが、祈りにも効果的かどうかということ、戦略的な祈りがあるのです。

戦略的な祈り①「決してあきらめずに祈ること」。1節から登場する一人の未亡人は自分には何の後ろ盾も助けもありません。また、35節から登場する、ひとりの盲人も大声で必死にイエス様に訴えて、その目を癒していただきました。そして、イエス様に従う人生に変えられました。彼も必死でした。自分にはもう何も無い。頼れるものもない、しかし、イエス様に希望を見出したのです。そして、ただひたすらに求め、その人生が変えられました。彼らにできたのはとにかくひたすらに訴えることだけでした。だからこそ力ある祈りとなったのです。

戦略的な祈り②「真のへりくだりの心で祈ること」。9節、パリサイ人は表面的には信心深く見えたが、その心は神の前に真実ではなく、傲慢そのものでした。しかし、取税人は心から自分が罪人であると自覚していました。そして、神のあわれみを必死で求めました。15節の幼子も取税人と同様、主に受け入れられましたが、それは神の前に小さな存在であるからでした。また18節、ある金持ちの役人も、イエス様のお言葉に深い悲しみに満たされました。その結果、自分の行いやお金では、神の恵みにあずかることはできないと悟りました。

その後、イエス様ご自身が十字架で最もみじめなお姿になり、そのお姿で、全人類の赦しを乞い願いました。それこそが真の祈りの姿であり、その祈りの故に私たちは救われました。